



6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 6 7

卷之三

1

10

10

10

光つのあめまれたり、のうへ降り辟たり
浦小あやみちくれにかきをなみらへ
まようてひるのうとは助

先づのあめされたりよりは、隠し辟たり
浦小生がみちくれにせたるみゆりを以て、旧幕もあき、いざるけりとあるまことせの、斤男吸とせりふ。
浦ハ男吸たりさもどる他、
邦の人民格うさだのめの人々がく文盲あり、之をあやえうちの心ハ陰のみちあらゆ。ばらたうるるそれや、おほむ他
者との方へ、至らしるる多ふ集まは卒をあぐとかく、きのまよ小ふをこめて、尽くす。卒傳名出あつううち人や、
盲小學をうかがひ、あんばにを一くまもや。方より少、秋のゆふ小學はれりみみみとあるまこと、
私心やねりえのうきとくさりあり、とくに教もと難を経るは、徳もくらむとあるまこと、
かたるみみるれり。うきを廻んとちりふ人ハ、もよ、余を取る
あがまの半らふ。今のは、海作ハ皆日本一小そくたるハ、いふをやなう經字書の傳教小程めろい。作トリ朱文公の
きよくそくたるくそくをもくせ、マサふがくいとく孔子や孟子や、孟子小やされ、赤子小ハいとれ
うきよくそん海作考経小とやあもて、讀ときハ陰てよもり、あわれ。今のは、学考小かくやうの事もあらうも、もやする
陽明流の考傷めも、出小よ。陽文忠公の仰、おきてをさしおりもとくううきくきつて、伝仰とちしハ、かく
いじと堯舜文武をいじて、さき
十三 雜學トシ
古今の考を元とし、小もよもよも雜學となむ。ひふ事、故ふ
凡ち半のたゞね人のいひ出セ。たゞん年古今の方を元とし、小もよもよも雜學となむ。ひふ事、故ふ
既往とよきんとて、山伏の冠する千ねをひひとよめハ、其がふありてひひの学のねくろいよ。か
首歌の文部内しののじ日致くふ字なうそのは代ぬ。亦とめのり、小字を頃時ふのくじ
竹君の代富士根富士の根ふ蔓、白子まの日がとのと同、助辞もあまのゆ、旗ハ文字な一それを山内や
入

のひれ、亭のふね、まの毒ふとくもやうとくと小汗を握て穴のものをかぶらむ。お盆あきるを二年半
でさうの老法医もて終り、つと彼儒者小向半太郎料理されと一がらみふ今日はうめよ月うてゆふ向
さうに、仰てお詫びすまうふとくと、いさかむくは越出ぬふてこと、うふとくと一がらみを立めひらて
きえ、猪もく用へき、ひけくらの儒者ハ、いわふあり、とのこをうくるす小ニ時わざとからだうるふ日を
費せり早く近延一をそくよゆりと用とせり、出入りまわりはめやうへきせーより是被たる小娘半太郎、
後立めり彼儒者の玄関はもう起りてひまゆうせちあひ小娘半太郎おまののを庵を定め、
うてふい歳とちうの申を経学よとくのくじを、儒者をきるしむては儒者もあ女流のものとくらむ
じ法の法くきいいくかねとくみるをあくねはるをきき、儒者形を

七

辛

見入て花船時とおをよめ 坂上毛則 花あづき歌をひくら
月夜のりゆて入る山のむらへとおをよめ 雄中
記示天の御より色を取よめのるす花のたぐいより、うきまつす。庄のほの瀬とはよもとの向中より歌く云
うり空舟船海上子規啼 大漢ふく、云をひれり決してくまや小はあまぞ激ふり、船上のうきよ小は洋の字よりをひる
たまぬるゝ橋テのくみ洋の字とハナ「庄人の船出もとを安洋く云ひうきしむく「文字少くらうふ保元
のほとうち常喜の世よりふき、六十六歳をひりうしく度へあやめりまく。備は八京の墨を取るこ山乃
まちれ日和のくうふ師をたまきて仲しけに医古のこま散水の傍下、山嵐瘴病のまふ中もあくともを忍れ、へんじ
あり少くいふ事多のむくさればこそ万葉ふ佳奈よやまのきりと別ぢらうと又スヌミリハあやめりさり、み後世、既
りやうるやもくとく多
馬寮御監とおなれもくわ軍家のおおとくらのめりある儒者御監の文字のありおふみむかとおのをとく
れくわがへくよのまくごそんくよもう吉寔(?)

和琴辨卷四
和也をもつてと別あるとあつてはいひ。うりおくると云せ給わぬのやうれられはうれを根分の洲よりみてよろ
ふ儒院へうりゆくよりじい川のひ行く人のうりうまそや。ひまうり俗語ありとてそのまきひくもひくもひくも
右あをえふるはるひやまうり俗語ありとてそのまきひくもひくもひくもひくもひくもひくもひくもひくも
天皇室深み照宣公勅令下を奉りて都の良香薦され偏に余なりたる史記こきの役者をアシタ小天官殿
印のちやか天皇一代の御血體をうづて御てての絶筆下トヨ春秋世小有ニとおきて別點シテかくのとくねりセモ
ナシ小洲點付たるハ久久人をやさしく海あつてうるをうるをうるをうるをうるをうるをうるをうるをうるを
文徳帝年二十よりとおこし
卒元吉子無事ふ泉州での宿とくまこのせぐるハあじのあじのすみ
ハ島忍壺訓ハねりあり手り尺もんに筋ありいつれしきをもて一束トト水戸彦の参考た年記ふ用ひ
りやハ西平のり板行の虫ハ傳接くアスアレドモ財ばを考ふみたとくとく多写すやかて傳くハ也あ
日本之のゆきとりふあはるのきねりくわわゆくは仏教の外リト有用のことをうるのうる達治北安のうちまくまくうる
ちねりが東洋ふ其玄祖とぞうらうほくと苦文字只あたうあくと外の記録あるがくと云ふハシモ其文をのせ

じとおひやうへ一叶の花の花がくわ
大全曰向嘆あれりたるて小危害（アシハラ）たるをもとをもつて
おどろき引蘖（ヒナギク）ひきかのれりあらはしもしきす
若氣（カニキ）出でさるをまづいふらはやじらへ
のうせにあらはすてたるをもとをもつて
おひにうひのれのりのふるひくわく
作医（ツバキ）ちかくわくのをものせらへ
益（ヨク）と俗人（ソクジン）はりてよしの医師（イシ）の事を取もと出で
ありてくわきをもとをもつてやまゆりのくわ
あらはく訓（クニ）もとをもつて、清めハ月見湯（ツキミノハ）をも
を能（モリ）ありふりてたるをもとをもつて
石くわくは益新文集（ヨクシンモンジ）ふくらはりけん
今（コト）の事のあらはすと多うとく
石九十九（シキキウシ）にあらはす
石九十九（シキキウシ）にあらはす

和学辨 大尾



